

共生時代の日本語教育

－日系ブラジル人を例に－

山下暁美・明海大学
auroralinda@nifty.com

1. 研究目的

本研究では、共生時代の日本語教育の再検討を目的として、日系ブラジル人の談話の印象と BTSJ を用いた分析結果との関係を明らかにし、在日日系ブラジル人話者にどのような日本語指導が必要かを考察する。「ディスコース・ポライトネス」(宇佐美 2001) の概念の延長線上により印象(以下、好感度)を位置づける。つまり、円滑なコミュニケーションをすれば、よい人間関係が築けるということを前提として、好感が持てる話し方でまわりの雰囲気をよくし、なごやかな友人関係を築くための日本語表現の指導法を目指す。円滑な人間関係構築を目的とした言語行動として、どんな言語表現が好感度に結びつくのかに着目する。

本研究のインタビューで、日系ブラジル人から、日本人は冷たく、友達になりにくいという声が聞かれた。インタビューのテープを聞いた日本人と他の外国人から、日系ブラジル人は、自己主張が強い、話すときの口調が強いという意見があった。日本人も日系ブラジル人も、話し手自身はそんなつもりはないであろう。それは、国民性、異文化だから仕方がないというひとことで済ませてきたような気がする。どのような日本語表現を用いれば、より快適な隣人、友人関係が築けるのであろうか。互いが住みやすい日本語、共存していくために必要な日本語表現能力とは、何かという点に焦点をあてて考える必要があるように思われる。

ザトラウスキー(2001)で、視線を向けたまま、あいづちも打たずにただ黙って聞いていた非日本語母語話者が嫌われた原因を分析している。そして、文化によってはよい態度とされるのに、日本では、このような行動はあまり好まれず、ただ単に文化の基準に従っただけなのに、性格が悪いと誤解されてしまう恐れがあると指摘している。

ここでの「共生」という意味は、本来ならば日本人、外国人を問わず、市民として良好な関係を保つという意味で使用すると考えられるが、日本社会がホスト社会であるので、受け皿側のコミュニケーションスタイルの修正は別の機会に述べるとし、日本語学習者への指導について提言を試みる。

日本の社会は多言語化が進んで、日本人と、多国籍住民間のコミュニケーション摩擦の問題が浮上している。ニューカマーと呼ばれる外国人の子供たちの言語学習環境づくりも手探り状態である。「国際化」という言葉が、どちらかといえば欧米志向のイメージを強調して、「国際交流」が英語を話せる人々を中心に進められたように思われる。時代は、「多文化共生」に入って、当時、国際路線を走った人々は、戸惑っているかのように見える。

日本の社会そのものが多言語化・多国籍化しているのであるから、以前にも増して共通語である日本語の役割は大きい。日本語によるコミュニケーションの摩擦問題は、日本人住民対外国籍の住民にかぎらず、外国籍の住民対外国籍の住民間にも起こりうる問題である。

言語表現が丁寧であれば、互いが住みやすいかといえばそうではなかろう。丁寧さと無関係ではないが、互いの立場を尊重したいこと、友達関係を保ちたいことが伝わるような、言語表現の中での配慮をうかがわせる情的な表現によるコミュニケーションが行われる必要があるだろう。

ブラジルには、約 150 万人の日系ブラジル人社会がある。そのうちの約 32 万人が就労目的で来日している(法務省 2007)。地域的には、主に、群馬、神奈川、愛知、静岡、長野、三重、滋賀などに集中していて、日本での通算滞在年数は 15 年から 17 年が最も多く 24% を占める。外国人集住年の内、ブラジルが第 1 位を占める市は、27 市(うち大泉のみ町)で、10 県である。

また、日本国内のブラジル人学齢児童生徒は、約 4 万人を数え、公立校在籍者 15000 人、ブラジル校在籍者 8000 人、不就学児童生徒 17000 人といわれる(関口 2005)。ブラジル人学校はインターナショナルスクールという扱いで、国内に約 100 校ある。

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))(2008 年度～2010 年度)『多言語社会の日本語教育に関

する社会言語学的総合研究』(研究代表者 山下暁美)の予備調査の段階での報告である。

2. 先行研究

宇佐美(2001)は、「ディスコース・ポライトネス」は、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である。」としている。また、円滑な人間関係を保つためのポライトネスは、話者間の力関係(Power)、話し手と聞き手の社会的な距離(Distance)、ある行為が相手にかける負荷度(Risk of imposition)の三要因(Brown&Levinson1987)が作用することについて、社会的な距離と負荷度はそれぞれ、「初対面の相手」「同様の場面で同様の話題について話す」ことで条件が一定に保たれ、「力関係」は、相手から見た年齢と社会的地位の高低で測ることができるとしている。

丁寧さに対する考え方について、水谷(1989)は、外国人学習者の話を聞くと、「polite でありたい」と考えている者が少なくとも大多数を占めていて、外国人にとって、丁寧さの基準が異なるであろうことは、容易に察しがつくが、学習者の文化からみて、基準が正反対であったりすることが往々にして起こると述べている。そして、待遇表現の指導の時期は、学習段階の如何を問わないものであり、日本語教育の開始時期が同時に待遇表現指導の開始時期であると述べている。

印象についてのアンケートは、本研究において、音声テープを用いたが、勅使河原(2008)は、声や話し方の知覚について、同じ音声を複数の被験者に聞かせると、抱かれる印象は被験者の間で驚くほど一致していて、声のステレオタイプと音声的特徴の対応について研究の必要があるとしている。本研究においては、言語表現に注目しているので、音声的特徴はここでは触れない。

あいづちの分類は、「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」(堀口純子 2000)を参考にした。あいづちは、話し手の発話権行使中で、行使者は聞き手である。そして、「聞いている」「わかった」「その先の話はどうか」を表現している。「情報共有」には肯定的、否定的、あいまいな立場の表明などがある。水谷(1988)によると、日本語母語話者は、相手が1分話す間に聞き手は、平均15回~20回あいづちを打ち、少ない場合で11回、多い場合で26回であった。

「ね」の機能について、宇佐美(1997)では、ディスコース・ポライトネスという観点から、会話促進、注意喚起、発話緩和、発話内容確認、発話埋め合わせの5つに分類している。

3. 研究方法

日本に定住する日系ブラジル人日本語話者5名の談話、1名につき約1時間のうち約10分間をBTSJ(Basic Transcription System for Japanese 宇佐美 2003)によって文字化し談話分析をした。また、日本人と、在日外国人(インフォーマントと同等か、それ以上の日本語力のある韓国人・中国人・タイ人)に日系ブラジル人の談話の印象を筆記式アンケートによって聞いた。そして、談話分析の結果と、印象との相関を分析した。収録には、ビデオテープと、ICレコーダーを使用した。

ここで談話資料として使用するのには、インフォーマントと、インフォーマントとは初対面の年上の日本人を中心とした2名の談話である。収録場所は、市役所と大学の一室で、インフォーマントと日本人のほかに、1名ないし2名の大学院生が同席した。収録は、最初はインタビュー形式で進めたが、インフォーマントがくつろいで、主体的に、自由に話すようになったとき、話題にこだわらず、そのまま話したいことを話せるよう、こちらでコントロールするのを控えた。

ACTFLのOPIテスター資格を取得した人に依頼し、約1時間の収録テープを聞いて、およそのレベルを測ってもらった(表1)。

印象アンケートは、音声のみのテープを使用した。音声を聞く回答者には、インフォーマントと日本人との関係が初対面であることは知らせず、日本に長く住んでいる日系ブラジル人で、仕事を持っている人もいるという説明をした。

話し方について、好感を持った度合いを0~5段階で示してもらい(表2)、5を最も好感を持ったポイントとし、平均値を出した。また、好感度が低い理由を「日本語力の不足」「なれなれしい」「やさしさが無い」「敬語を使用していない」「わかりにくい」「その他」で書いてもらった。

印象項目を細かく「明るい人」「好きになれそう」「魅力的」などに分けなかったのは、これらの項目は、

よい印象、すなわち好感度につながるものの、本研究では、日本語学習者がどのような日本語学習をすれば日本の社会に好感を持って受け入れられるかということを目的にしているため、漠然とした印象項目は省略した。また、「自信を持っていそう」「積極的」「元気」などの印象については、国会議員選挙などの社会的な評価では、好感度をあげるが、個人的な評価では、日本人社会では、必ずしも好感度を上げることにならない場合もある。

印象を聞いた回答者は以下の通りである。

☆印象についての回答者（カッコ内の数字は人数）

- ・国籍 日本 (10) 韓国 (1) タイ (1) 台湾 (1)
- ・年齢 20 歳代 (7) 30 歳代 (2) 40 歳代 (3) 50 歳代 (1)
- ・性別 男性 (3) 女性 (10)
- ・社会経験 有 (8) 無 (5)
- ・日本語を教えた経験 有 (9 うち 5 名は 1 年以下) 無 (4)

4. 分析方法

分析方法には、日本語話し言葉コーパスを中心にした 小磯他 (2001)、好井他 (1999) などがあるが、目的とする好感度項目を定量的に分析しにくい、分析項目が目的とする談話分析に適さないなどの理由で BTSJ (宇佐美 2003) を用いて分析した。分析については、評定者間信頼性係数 (Cohen's Kappa) の算出を行なった。信頼性係数は、単純一致度から偶然の一致する確率を差し引いた指標が、 $\kappa=0.7$ 以上だと、信頼性が高いとされる。

分析項目は、(1) 終助詞、(2) あいづち (① 1 発話とカウントするあいづち ② さえぎらないあいづち)、(3) 敬語 (① 発話文全体 (S/P/N/NM) S: super-polite form P: polite-form N: non-polite form NM: non-marker ② 発話文末 (S/P/N/NM))、(4) 全体の機能 (F/C) について、F: formal な感じがする発話、C: カジュアルな感じがする発話、に分類した。評定者間信頼性係数 (Cohen's Kappa) は、平均値 0.86 であった。その他、スピーチレベルシフトのコーディングも行なったが、ここでは省略する。

○BTSJ についてのシステム、ルールは以下のとおりである。文字化の例を表 1 で示す。

☆文字化システム

- ① 漢字仮名交じり表記である。
- ② 話者交替・間という 2 つの要素を考慮した上で「発話文」を認定する。
- ③ 会話という相互作用の中における「文」として文字化する。
- ④ 「1 語文」「中途終了型発話」など、完結していない発話もある。

☆文字化のルール

- ① 話者が交替するたびに改行する。
- ② 話者が交替しなくとも、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するとき、「発話文」ごとに改行する。
- ③ 相手の発話に重なる短い小声のあいづち (ふーん等) や笑いは、() に入れて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。

☆発話文終了、改行に関わる記号

- ① 第 1 話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第 2 話者の発話が始まり、結果的に第 1 話者の発話が終了した場合、「【】」、第 2 話者の発話文の冒頭に「】」を付す。
- ② イントネーションは、[↑] [↓] [→] で示す。
- ③ 間、沈黙は、/少し間/ /沈黙 3 秒/などと記す。
- ④ 言い淀みは、「・・・」で示す。
- ⑤ 発話の重複は、< >{< } 重ねられた発話、< >{> } 重ねた発話、と記す。

⑥聞き取り不能文は、#で示す。

表 1

54	49-2	*	B	最初どちらに入られたのかしら。
55	51	*	A	えーっと父は—あの一(うん—)、もう家族で行ったんですね(うん)。
56	52-1	/	A	だからまだ 14 歳ぐらいの時に行ったんで(うん—)、えーっともうほんとにあの一、パラナ州じゃなくって—、もっと南の方で、リオグランデスールって<いう所に>{<,,
57	53	*	B	<うん、>{>はいはい<はいはい>{<。
58	52-2	*	A	<行って>{>そこで—(うん)、あのなんか雇われていたっていう形なんですよね(ふ—ん)。
59	54	*	A	で、それで—、えーと、まあいったんあの、こう雇われて—(うん)、仕事をしているうちに—(うん)、まあえ—土地を買える??(うんうん)、ぐらいになったので—(うんうん)、あのそのパラナ州って所で(あ—)土地を買って—農場を(ふ—ん)始めたんですね。

(左から、ライン番号、発話文番号、発話文終了、話者、発話内容の順)

○終助詞について、以下のように分類をして、数をカウントした。

- (1) 「か?」、か[↑]、「か」、「か—」などは「か」の項目に含める。
- (2) [↑]「??」「↑?」「?」などは「?」の項目に含める。
- (3) 「かね? [↑]」は「ね」の項目に含める。
- (4) 「ね」、「ね?」、「ね」[↑]、「ね—」は「ね」の項目に含める。
- (5) 「の」、「の?」、「の」[↑]は「の」の項目に含める。
- (6) 「のよ」、「のね」、などは、それぞれ「よ」、「ね」の項目に含める。
- (7) 「よね」「よね?」「よね—」は「よね」の項目に含める。
* 「かな」、「かな—」、「かね」、「のよ」、「のね」など、組み合わせさっているものは、後方の「な」「な—」「ね」「よ」「ね」で分類する。ただし、「よね」について、「よね」は「よ」と同様に「感情の表出」度が高いと思われることから、「ね」ではなく「よね」で分類する。
- (8) 文が倒置しているものは、元の形に戻して拾う。

○あいづちの分類について、以下のように分類をして、数をカウントした。

- (1) あいづちは、あ系、う系、え系、そう系、は系、ふ系などに大きく分類する。
- (2) 特別に区別するもの、例えば、「ああ、そうですか」など以外は、(1)の区別に従う。
- (3) 「そうです」の項目を立て、「あっ、そうですね」などは、「そうです」系に入れる。この場合は、「あっ」「ああ」などは分けない。「そうですか」「そうですね」など、「です」を含むものは「そうです」系とする。「そうか」「そう」などは「そう」系とする。
- (4) 1 発話に複数あいづちがある場合は、1 番はじめに出てくるあいづちのみを数える。「ああ、ええ。」の場合は、「ああ」の項目に含める。
- (5) 「そうすると」「それで」は「そう」系に含め、「そう」系の分類の中で、それぞれ詳しく見ることにする。

5. 結果の分析

本研究は、今年度スタートしたこともあって、インフォーマントは 5 名である。現段階での結果について考察する。インフォーマントの属性は表 2 に示した。平均年齢は、39.8 歳であった。5 名の内 4 名が 2 世であった。国籍は、1 名を除いてブラジル国籍である。コロニアというのは、日本人が初期に入植した地域を中心に発展した町で、同県人や、同期の移民を核として形成された地域である。コロニアでは、歴史的に日本語学校において国語教育ないし日本語教育が盛んに行なわれてきた。17 年、19 年のコロニア経験があるということは、コロニアで生まれ、義務教育を終えるまで当地に住んだと考えられる。インフォーマントの 1 名はコロニア経験がないが、3 世ともなると、2 世の両親が都市へ移動しているケースが多い。在日年数の長期化を反映して、5 名の平均在日年数は、12 年であった。日本語学習年数は、日本語学校で習った通算の期間を意味するが、長い人で 14 年、短い人で 3 年で、うち 4 名は現在も公民館などの日本語

講座で日本語を学習している。母語は1名を除いてポルトガル語であった。インタビューはOPIの方式に沿って行なったわけではないので正確なことは言えないが、有資格者が判定した、およそのレベルを参考にあげておく。

(表2) インフォーマントの属性

	年齢	世代	国籍	出身地	コロニア	在日年数	日本語学習	母語	レベル
D	30歳代	2	ブ	パラナ	17年	8年	4年	ポ	上級
B	40歳代	3	日	サンパ	なし	18	14	ポ	上級
A	30歳代	2	ブ	サンパ	3	4	3	ポ	上級
E	50歳代	2	ブ	パラナ	19	15	8	日	中級
C	30歳代	2	ブ	サンパ	1	15	4	ポ	中級

(※A・B・C・D・Eはインフォーマントを示す。散布図の好感度順・ここでは散布図を省略する。)

(表3) 話し方の好感度と、好感度が低い理由

	好感度	日本語力不足	なれなれしい	やさしさがない	敬語非使用	わかりにくい	その他
D	4.6		1	1			「まあ」の多用
B	4.3		2	1			口調が強い・早い
A	4.1		5	1	2		はっきり話し、口調が強い
E	3.9		3		3	2	イントネーションが違う
C	3.8	5			3		「です・ます」の非使用

表3は、13名の印象の評定結果である。印象は、インタビューと収録の場に同席した院生の印象とほぼ一致した。つまり、コミュニケーションには非言語要素が大きい割合を占めるとされるが、このような談話の場面では、非言語要素を入れても、印象はあまり変わらないと考えられる。「日本語力不足」、「敬語非使用」、「わかりにくい」などが、好感度を下げるのは、ある意味当然と考えられる。好感度が上位でも、「なれなれしい」「やさしさがない」という傾向が強い。

話し方の好感度と談話分析の各項目にかなりきれいな相関が見られる(表4)。総発話回数の平均は10分間で約118回であった。終助詞と敬語の使用、フォーマルな話し方は、好感度と正の関係を示した。好感度が上位のインフォーマントは、終助詞を、10分間に約40回から約60回程度使用している。終助詞の使用回数が増えても、好感度は下がらないという傾向が見られる。

(表4) 話し方の好感度と談話分析の結果との相関関係

	総発話回数 (10分)	終助詞	あいづち回数	さえぎらないあいづち	敬語数	普通体数	フォーマル	カジュアル
D	118	64	36	7	41	2	66	40
B	96	39	28	11	31	18	35	39
A	125	41	39	4	35	19	36	75
E	158	47	61	4	24	43	43	105
C	92	8	52	6	4	13	12	70
相関係数		0.768	-0.758	0.492	0.835	-0.606	0.810	-0.775

あいづちは、終助詞と違って、負の関係を示した。つまり、10分間にあいづちは、30回から40回を超えない程度がよく、それよりもあいづち回数が多いと好感度を下げるといった結果になった。水谷(1988)によると、日本語母語話者は、相手が1分話す間に聞き手は、平均15回~20回あいづちを打つとしている。10分間に換算すると、平均150回~200回ということになる。本調査の結果を見ると、あいづちの回数はかなり足りないことになる。

小宮(1986)によると、日本語母語話者のあいづちについて、テレビ対談は、9.6秒に1回、ラジオ相談は、6.1秒に1回としている。本調査で、日系ブラジル人は、さえぎらないあいづちを入れて9.2秒に1回の人から、15.3秒に1回の人までと個人差があるが、平均すると12.3秒に1回のあいづちを打っている。また、聞き手の日本人は、7.2秒に1回のあいづちを打っているという結果になった。小宮の結果と比較して、日本語母語話者は小宮(1986)の結果の範囲におさまるものの、日系ブラジ

ル人は、平均 12.3 秒に 1 回の頻度で低いといえる。

今日では、英語教育の普及や、海外旅行など海外の文化との直接的な接触の増加の影響か、日本語母語話者も少しあいづち回数が減少しているといった印象を受ける。日本語母語話者のあいづち回数の 5 分の 1 程度に抑えたほうが、好感度を上げるという結果は、外国人日本語話者への母語話者の期待を示していると考えられる。つまり、日本人並みにあいづちが多すぎると「なれなれしい」と思われるかもしれない。さえぎらないあいづちについては、全体的には相関は強くないが、もう少し回数を増やす必要があると考えられる。

敬語が正しく使えることと好感度は強い正の相関関係を示した。敬語が使えないと、好感度は下がるので、よい関係作りには、欠かせない学習項目と言える。

また、普通体の多用は好感度を上げない。日本語学習者は、普通体を使うことによってカジュアルな感じを出し、フレンドリーな関係を築こうとする傾向が時々見られる。ウチ・ソトの感覚が希薄である。しかし、本調査では、日本人社会では、社会人としては、敬語を使わないと好感度を下げ、カジュアルな話し方は、フレンドリーというより、なれなれしいという印象につながりやすいことが明らかになった。場面によるが、やはり初対面では、「です」「ます」で話す習慣が必要とされる。あいづち、普通体の使用、カジュアルな話し方は、負の相関を示していることから、日本語指導が必要であると思われる。

6. 今後の課題

以上、終助詞、あいづち、敬語、全体の機能について、好感度との相関を概観したが、今後はインフォマント数を増やして、量的、質的の両面から相関を見て行く必要があると思われる。

日本語運用能力が低いと好感度は下がるものの、「なれなれしさ」、「やさしさが感じられない話し方」、「はやすぎる話し方」なども、好感度に影響していることが明らかになった。「なれなれしさ」は、終助詞や、あいづちの回数にも関係があると思われるが、ただ、使用するのではなく、これらの言語形式を使って、どのように表現すればいいかという、表現力の指導を研究する必要がありそうである。

「やさしさが感じられない」という点については、何がそういう印象を与えたか、さらに分析をする必要がある。あいづちの結果は、聞き手の言語行動に注目した指導のありかたを考える必要があることを示唆している。

今回は、対象にしなかった、副詞の「ちょっと」「少し」「絶対に」、動詞の「思う」など、言語的ヘッジにも今後注目していかなければならないだろう。

本稿では、あいづちの頻度は、明らかになったが、バリエーションについて詳しい分析をしなかった。

参考文献(アイウエオ順)

- 宇佐美まゆみ 1997 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』(現代日本語研究会編) ひつじ書房
- 宇佐美まゆみ 2001 「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能」『語学研究所論集』第6号 東京外国語大学語学研究所
- 宇佐美まゆみ編 2006 「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」『言語情報学研究報告 13』東京外国語大学大学院地域文化研究科
- 小磯花絵・土屋菜穂子・間淵洋子・斉藤美紀・籠宮隆之・菊池英明・前川喜久雄 2001 「日本語話し言葉コーパス」における書き起こしの方法とその基準について」『日本語科学』9 国書刊行会
- 国際交流基金サンパウロ日本文化センター2003 『ブラジルの日本語教育—初等・中等・高等教育の学校と講座』国際交流基金サンパウロ日本文化センター
- 小宮千鶴子 1986 「相づちの使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所
- 佐々木由美 2003 「言語能力とコミュニケーション」西田ひろ子編『日本企業で働く日系ブラジル人と日本人の間の異文化間コミュニケーション摩擦』創元社

- ジョージ・サーサス著 北澤裕・小松栄一訳 2005『会話分析の手法』マルジュ社
- 関口知子 2005「在日日系子弟の教育と日本の学校：人材育成システムの視点から」
『季刊 海外日系人』第 57 号(財)海外日系人協会
- 勅使河原美保子 2008「音声による人物像の表現と知覚」『言語』Vol. 37 No. 1 大修館書店
- 堀口純子 2000『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- ポリー・ザトラウスキー 2001「相互作用における非言語行動と日本語教育」『日本語教育』110 号
日本語教育学会
- 牧野成一他 2001『ACTFL—OPI 入門』アルク
- 水谷信子 1988「あいづち論」『日本語学』第 7 巻第 13 号 明治書院
- 水谷信子 1989「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69 号 日本語教育学会
- 森田笑 2007「終助詞・間投助詞の区別は必要か」『月刊言語』Vol. 36 No. 3 大修館書店
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰 1999『会話分析への招待』世界思想社